

添付資料(2):シマアオジ、アカモズ、オジロワシについて

●シマアオジ(スズメ目ホオジロ科)

- ・ 分布:ユーラシア大陸北部および日本で繁殖、ユーラシア大陸南部で越冬する。日本には繁殖のため、主に北海道に飛来する夏鳥。
- ・ 全長:全長 14~15cm。スズメよりやや小さい。
- ・ 生態:平地の草原に生息し、明るく開けた場所を好む。繁殖期(5~7月)には縄張りを作り、草の根元に枯草や木の枝で皿状の巣を作る。夏は昆虫類、冬は植物の種子を主に食べる。繁殖期には縄張りを形成する。
- ・ 希少性について:2006年12月の環境省レッドリストの改訂で、準絶滅危惧から一気に、絶滅危惧ⅠA類(ごく近い将来に絶滅の危険性が極めて高い種)にランクアップした。既知の生息地でほとんど生息しなくなった場所が多く、環境省による1997~2002年の調査では、特に北海道北部と東部での個体数減少が著しく、全道でも15地点のみ(1978年の71%減)しか確認されていない。生息状況悪化の原因は、キツネなどによる捕食圧の増加や、渡りのルートと考えられる中国における違法な食用捕獲が考えられるが、具体的にはわかっていない。

●アカモズ(スズメ目モズ科)

- ・ 分布:中国、ロシア東部、朝鮮半島および日本で繁殖、東南アジアで越冬する。日本には繁殖のため、北海道および本州東部に飛来する夏鳥。
- ・ 全長:全長 20cm。スズメよりやや大きい。
- ・ 生態:開けた森林や林縁、草原などに生息する。繁殖期(5~7月)には縄張りを作り、樹上に枯草で皿状の巣を作る。主に動物食であり、昆虫や節足動物のほか、爬虫類や両生類、小型の鳥類や哺乳類を食べる。
- ・ 希少性について:2006年12月の環境省レッドリストの改訂で、準絶滅危惧から、絶滅危惧ⅠB類(ⅠAほどではないが、ごく近い将来に絶滅の危険性が高い種)にランクアップした。環境省による1978年の調査結果では北海道、長野を中心に局地的に生息が確認されていた。近年は各地で生息数が減少しており、1997~2002年の調査では確認地点が激減した。河川敷など生息場所の開発や越冬地の環境悪化などが原因として考えられているが、具体的な因果関係は不明。

●オジロワシ(タカ目タカ科)

- ・ 分布:ユーラシア大陸北部で繁殖し、中国東部、ペルシャ湾周辺に南下し越冬する。東ヨーロッパや西アジア、中国北東部などでは周年生息する。日本では主に冬に北日本に飛来(冬鳥)するが、北海道北部および東部では周年生息する個体もいる(留鳥)。
- ・ 全長:70-98cm。翼開張 180-240cm。体重 3-7kg。

- ・ 生態:海岸、河川、湖沼などに生息する。単独もしくはペアで生活するが、冬は集団で休む事もある。食性は動物食で、魚類、鳥類、哺乳類、動物の死骸などを食べる。高木の樹上や断崖に木の枝を組み合わせた巣を作り、3-4月に産卵。
- ・ 希少性について:種の保存法による国内希少野生動植物種、絶滅危惧 I B 類、国の天然記念物に指定されている。北海道内で越冬する個体数は約 1,700 羽(うち、繁殖つがい数は約 140 ペア)とされている。
- ・ 風車への衝突死について:オジロワシは 2010 年 12 月現在、国内で 20 羽が風車に衝突して死亡していると考えられている。欧州でも風車への衝突死が多く、例えばノルウェーのスメーラ島では年間に約 10 羽のオジロワシが死亡している。オジロワシは雑魚が多く捨てられる漁港に集まり、また上昇気流を利用するため海崖のある場所を好み、そのような場所に風車があると衝突する危険が高いと考えられる。また、飛翔高度 25~100m 付近(風車のローターと同程度の高さ)をゆっくりとした速度(餌を探しながらの飛行)で飛ぶことが多く、このことも衝突の危険性を高めていると考えられている。アメリカの研究では、猛禽類の衝突死の要因は、探餌行動とモーションスミア現象(※)の組合せによるものが大きいとされている。

※ モーションスミア現象:ブレードの回転速度が一定以上になると、鳥の網膜が高速運動を処理できなくなる、つまり見えなくなってしまう現象。人間でも回る扇風機の向こう側が透けて見えるが、猛禽類では早い段階でこれが起こる。